

第二の隕石が目前に迫る、現在

クオインタムリープ株式会社
代表取締役ファウンダー&CEO

いでのぶゆき
出井 伸之



1937年東京都生まれ。1960年早稲田大学卒業後、ソニー入社。主に欧州での海外事業に従事。オーディオ事業部長、コンピュータ事業部長、ホームビデオ事業部長など歴任した後、1995年社長就任。以後、10年に渡りソニー経営のトップとして、ソニー変革を主導。退任後、クオインタムリープ設立。NPO法人アジア・イノベーターズ・イニシアティブ理事長。

インターネットは社会に落ちた隕石である。

一九九四年、当時アメリカ副大統領アル・ゴア氏が情報スーパーハイウェイ構想を発表したときに感じた衝撃を、私はこのような表現で周囲に話していました。

この隕石とは、今から六六〇〇万年前、ユカタン半島近くに落下した直径一〇キロメートル大の隕石のこと。隕石落下の衝撃は同時にメガ津波、山火事、大地震、火山噴火を誘発し、当時の生物界を支配していた恐竜を絶滅に追いこむとともに、その後の哺乳類の隆盛を起す要因とも言われています。

技術トレンドと、ビジネス・社会の変化には、密接な関係があります。社会に変革がもたらされるときの多くは、まずは技術面で起きた大きな変革が広がり、それが従来の社会を次第に変えていくことで形成されます。例えばかつての半導体技術の進歩は、ハードウェアという日本のビジネス基盤をつくりました。そうして飛躍した好例がソニーです。また一九九〇年代に登場したインターネット

も、現在はあらゆるビジネスの基盤OSとなり、確実に社会の姿を変えています。あるデータによると、二〇〇〇年にFortune 五〇〇にランクインした企業の半数以上が、その後一六年の間に倒産・買収などで、消滅したそうです。インターネットという技術の変革が、旧来の社会の姿を破壊した結果といえるでしょう。

一方、日本の大企業では、その変化に対して企業再編・合併など度重なる合理化で耐えしのぎ、現在も日本経済の中心に君臨しています。その流れの中で、残念ながら日本は「インターネット後」の世界から乗り遅れてしまいました。グローバルやアマゾン、フェイスブックといった、インターネットから新たな価値を世界に創出する企業が、日本から現れることはありませんでした。I・I・J鈴木会長が著書『インターネット日本書紀』の中で喝破された「日本にIT産業はない。IT利用産業があるだけだ」ということが現実です。日本は隕石の衝撃から導かれた哺乳類誕生への流れに抗い続け、結

果的に苦境に陥った国になりました。

ところが現在、インターネット登場よりも大きな変化を感じています。「第二の隕石」になる決定的な技術変革が、一気に押し寄せてきているのです。なかでもAI、ブロックチェーン、ビッグデータ解析などは、社会の基盤OSそのものをアップデートする大きな技術変革といえるでしょう。そして今回の変化の特徴は、それぞれの技術変革が絡み合っており、また日本の得意なハードウェアや、ネットワークの進化とも一体化ながら、大きな流れを生み出し、世の中を変えていきそうだという点です。これまでにないスピードで社会は創り変えられていくでしょう。日本は二〇年前の失敗から学び、ビジネス、研究、行政それぞれが協力して、新しい世界の形から未来を描かなければいけません。

二〇一七年は、大きなチャンス到来のとき。次こそ、日本に哺乳類を生み出すタイミングです。東京オリンピックにお熱を上げてばかりではちよっともったいないかもしれませんよ。

次号は、三菱UFJフィナンシャル・グループ(前) 副社長の田中正明氏にお願いいたします。

※本コーナーは、弊会ホームページでもご覧いただけます。